

初心・円満・^{あわ}憐れみ

小野派一刀流宗家 笹 森 建 美

聖書

ヨハネの第 - の手紙 2 章 7 節から 8 節まで

愛する者たちよ。わたしがあなたがたに書きおくるのは、新しい^{いまし}戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めである。その古い戒めとは、あなたがたがすでに聞いた御言である。しかも、その新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。

マタイによる福音書 5 章 3 節から 10 節まで

「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは^{なぐさ}慰められるであろう。

^{にゅうわ}柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは^あ飽き足りるようになるであろう。

あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。

心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」

* * *

本日は清教学園にお招きいただき、宗教週間のご用に当たれますこと、感謝申し上げます。キリスト教と武道の関係をテーマに礼拝の説教と、それとの関連で、古武道の組大刀の演武の依頼を受けました。

私は牧師ですが、同時に小野派一刀流、神夢想林崎流、直元流などの宗家でもあるので、よく不思議がられたり、「キリスト教と武道とは矛盾しないのか。」と聞かれたりします。その都度、武道の精神とキリスト教信徒の在り方は、深い所で合い通じるところがある事を話すようにしています。本日は特にその事を話す様にとの事で、喜んでお引き受けした次第です。お聞きする所によれば、この学校は、クリスチャン・スクールで勉学もよく行い、柔道、剣道、なぎなたにも力を入れていらっしゃるとの事で意を強くしています。

それだけではなく、この学校の成り立ちの「青春輪舞」を読ませていただいて、大変感激しました。教会学校の生徒さん達の、希望に託した熱心さと、神への信頼に打たれました。私も、小さな教会ですが、自分達の家を開放して、道場と、教会を始めました。最初の礼拝に集まったのは4人の中学、高校生でした。しかし今は60人位の人たちが礼拝に集い、会員数は約100人になりました。しかしこれから教会堂を大きくしなければならぬし、道場も広くしなければと問題が山積していますが、本を読ませていただいて、また力が湧いてきました。本当にありがとうございました。

さて、本題に入りたいと思いますが、キリスト教と武道の接点になるいくつかの考え方を取り上げたいと思います。「青春輪舞」を読んで、私も教会を始めた時の初心に帰らなければと思いましたが、まずこの「初心」という事に触れたいと思います。

よく、初めからやり直すつもりで、心新たに物ごとに当たる時、「初心に帰るつもりで」と言います。また、やり始めた物事を心変わりすることなく最後までやりとげる事を「初志あるいは初心を貫く」と言い、物事が順調に進んでいる時、調子に乗って思わぬ失敗をしないように戒める時、「初心を忘れずに」とか言います。

例えば、新しい年を迎える度に、私たちは「今年こそは、勉強しよう。」と決心をしながら、年終る時、結局は途中で挫けてしまったり、横道にそれてしまった自分を見だし、情けなく思い、後悔する事があります。

私たちが物事を始めようとする時は、新鮮な思いに満ち、希望を持ちまた素直な初々しさを持っているものです。たぶん私たちの心の問題、精神的な生活においても、同じ事が言えます。キリスト教に触れ、神を求めようと思いだした時は、新鮮な、素直さに包まれていたのに、時が経つにつれて、成長するのならいいのですが、立ち止まったり、逆の方向に向かってしまう事がしばしば起こってしまうのです。

信仰にとって大事な事は、初めの時の、純粹さ、素直さ、新鮮さ、そして初々しい驚きを持ち続ける事です。主イエスは、「幼子のような信仰を持ちなさい。」と教えておられますが、その意味は、「余計ないろいろな事を考えすぎて、色のついた、よろよろした信仰ではなしに、素直な、まっすぐな、上に伸びていく信仰を持ちなさい。」という事だと思えます。

さて、「初心」という言葉についてもう少し考えて見たいのですが、実は武道、剣道の教えでは奥義に到達するいくつかある段階の一つが「初心」です。

突然話は変わりますが、私は20年ほどキリスト教学校の宗教主任を勤め、聖書の授業を教

えていました。ある時生徒から手紙が来て、「先生の絶妙な授業を楽しみにしています。」と書いてありました。「絶妙」という言葉をどういう意味で使ったかは分かりませんが、それを見た家内が「これはごまの擦り過ぎだ。」と言い、私は「そんな事はない。まだまだだ。」と、やり取りをした事がありました。

良い授業だとか、分かりやすい授業、面白い授業とかいうのならともかく、「絶妙な授業」と言われても、果たしてどんな授業なのかぴんと来ないかもしれません。そこで「絶妙」とか、「初心」とかどんな意味合いがあるのか説明を加えていきたいと思います。(少し、理屈っぽくなりますが、辛抱して聞いて下さい。)

武道の奥義の言葉として、「居、合、行、表、次、序」という教えがあります。一つ一つ詳しくはお話しませんが、「居とは、自分の今、居る場所、何処に居るか、どんな立場なのかを弁える事、「合」とは、相手の立場、状況、環境に合わせる事、ここから、いわゆる「居合」という言葉が出てきます。(居合とは剣の技の、初めの一段階だという事です)。

「行」とは、居と合を行う事なのですが、それは力であり、所作、動作の形であり、実態があるけれど見えないものです。つまり物の重さのようなもので、重さというものは、実態はあるが形のないもので、それを知る一つの手段として秤があるように、「行」を形にするものが「表」、表れです。

その表れ、表に「次」、つまり次第、順、段階、があるという事です。そしてその次第は「序」によって示され到達するという事です。

「序」とは、もともと「堂」の東西の^{しず}埴めを意味し、区別あるいは違いを認識するという事から、「品節」を意味するようになります。聖書でいう、神と人との違いを知ることによって、神を^{おそ}畏れる^{けんそん}謙遜、そして、品節ある信仰が生じてくるという教えに通じるのです。更に、この「序」にも段階があって奥義に到達していきます。そして、「絶妙」あるいは、「^{せいみょう}精妙」という言葉は、「居、合、行、次、表、序」の、「序」のところに当たる次第、つまり段階の中に出てくる概念なのです。

剣道では、この段階が八つに分かれています。そしてこの段階の中に「初心」という言葉も出てきますが、実は初心とは最初の段階ではないのです。私たちは普通初心を最初、と考えていますが、そうではないのです。初心の前に「入門」という概念があります。そして入門の前にまだ「^{しどう}志道」という事が言われているのです。

つまり第一、一番初めの段階は、その道に志す、「志道」という事です。その道に志す、

つまり入って見よう、求めて見ようと思いを向ける事です。そこで初めて「入門」という事になります。そして入門した結果しばらくして、その道の最初の部分、「初心」が分かり身についてきます。初心の段階が過ぎた次の段階が「未熟」です。良く謙遜して未熟者と言いますが、これでいくとそんな謙遜でもないわけです。未熟の上が「熟練」です。熟練の上が「上達」です。大分上達したと言いますが、上達は熟練より上なのです。その上が「精妙」あるいは「絶妙」なのです。熟練して、上達してもまだ不十分で、その業は精妙にならなければならないのです。ですから、生徒の手紙に書いてあった、絶妙あるいは精妙というのは確かに褒め言葉で、大分ごまをすっていると言えるのですが、実はもう一つその上があってそれを「円満」とよんでいます。ですからどうせ褒めるのなら「絶妙な授業」と言わないで、「円満な」と言ってくれなければ・・・という事になります・・・まあそれはともかくとしても・・・人はあるところまで達すると円満になるのだと思います。

後で、実際に演武をして、お見せしますが、一刀流の奥義の中に、五点と言う技があります。木、火、土、金、水の五行になぞらえています。「妙剣、絶妙剣、真剣、金翅鳥王剣」と進み最後は、「独妙剣」と名付けています。そめ奥義は妙である事も捨て、水の如く、柔らかく、自在になれとの教えです。絶妙のまだまだ上があるのです。

一刀流の五点の技は、大変すぐれた技で、一刀流以外でも、ほとんどの流派がこの技を取り入れています。ですからもし、この学校の剣道部でも、この技を取り入れたら、全国制覇も可能になる事でしょう！

五点とは、五つの区切りという意味ですから、この技は、五つの段階に別れています。ひとつひとつが、大変すぐれたものなのですが、更にそれらが順次高められ、深められ、全体として、本来の意味、奥義を示しています。先程読んでいただいた、イエス様の、祝福の教えも、九つの項目に分けることが出来ますが、一つ一つ、みな意味があると同時に、更に深められ、そして全体として、信仰の奥義を示しています。この祝福の教えと、五点の目的とが、とても良く似ているのです。多くの武道家、特に達人と言われた人達が、禅や、神道の教えに接点を認め、そこから奥義を見いだしたり、悟りを開いたり、救いを求めたりしましたが、武道の目指す最終的なものが、人の生死に関わるものである事が分かったとき、どうしても宗教の世界に入っていかなざるをえなかったのだと思います。ですから、もしキリスト教が、もう少し早く日本にはいり、広まっていたら、宮本武蔵や、塚原卜伝、小野次郎右衛門など、多くの剣豪たちが、クリスチャンになっていたかもしれません。事実、小西行長や、高山右近などという武将達も

信仰を受け入れていますし、山鹿流の山鹿素行の子孫もクリスチャンとなり、牧師になっている人が何人もいます。

(一) 妙剣——木

五点の第一の技は妙剣と言い、木になぞらえています。妙とは、説明が不可能に近い妙えなる働き、真理という事です。木は小さな種から、その穀を破って芽を出し、芯を伸ばし、茎となり、木となって、無念無想、たくむ事なく、天を目指して、力強く伸びていきます。それを妙の働きと説いています。剣道に限らず、相手に勝とうと、あの手、この手をあまり考えすぎると、かえって技がちじこまり、小さくなり、負けてしまうものです。夢想になって、自然に出てくる技を使いなさい、またそうなりなさいと説いているのです。

イエス様も、天国や、信仰者の在り方を、からし種に例えて教えておられます。からし種はとても小さい物だけれど、地に蒔かれると、芽を出し、いつの間にか大きくなって、やがては空の鳥が来て宿るほどに成長するけれど、人には何時、どうやって大きくなっていくか分からない、それは神様がお作りになった、この自然の秩序の中で、自然に大きくなっていくのだ、だから信仰も、神様にお任せして、神の御心を信頼していけばいつの間にか大きくなるのだと教えておられます。「青春輪舞」を読んでいると、多くの人々の大変な努力があったのも確かですが、その中心にあったのは、教会学校の生徒さんたちの、純粹な、まっすぐな信仰があってこの学校が成長すべくして成長したのが良く分かります。

(二) 絶妙剣——火

妙を絶し越えたものが絶妙で、火で表します。昔マッチ一本火事のもと、という言い方がありましたが、火は最初は小さな一点の火でも、燃え出すと、火炎となり、風に煽られると紅蓮の炎となり大火となります。火はすべてを焼きつくす力をもっています。宗教では、火は汚れを焼きつくす、潔めの力となっています。

5月18日はベソテコステでしたが、「聖霊が火のように、炎のように下って来た。」と聖書に記されています。そして神の息が風となって吹き込んだ時、大きな力となって3000人にも及ぶ大勢の人が、心を動かされ、洗礼を受けました。そして教会の誕生となり、今日全世界に教会が建てられているのです。聖書でも、火は潔めの力として語られています。モーセが神と出会ったのも、燃える不思議な柴を通してでした。

(三) 真剣——土

真剣の構えは、常に真ん中です。土は中であり、すべてのものが中って(あたって)帰ると

ころです。空中に投げられたものは、全て土に戻り、土に中ります。一切のものを生じ、育て、発し、集め、帰し、蔵するところです。聖書（創世記）が告げるように、人は土で作られ、土に帰ります。

土は季節の用語でもあります。季節の変化の真ん中が土用です。土用の前後には季節の変化があり、それを押さえ、^{しず}鎮めているのが真ん中、土用です。また土用とは、土の中の死を破って土の中に生命を開く事をも意味します。地の中は死の世界でもあります。蒔かれた種に命を与えるように、死に命をもたらすところでもあります。イエス様は十字架の後三日間墓の中に^{ほうむ}葬られました。しかし地の底の死と^{きよむ}虚無を破り^{よみが}甦えられました。死の世界を、命の世界に変えられたのです。一粒の麦のたとえのように信仰とは死ぬ事によって、新たな命、より多くの実りをもたらす逆説の世界なのです。そして、武道の精神もまた死ぬ事によってその意味を完成させるものなのです。武士道とは死ぬ事と見つけたりとは、このことを言っているのです。

（四）金翅鳥王剣——金

悪い竜を退治する大鳥（鳳凰）が金翅鳥です。金は、光り、輝き、重さなど総ての金属に勝る最高のものです。従って、この技は、^{いげん}栄光と威厳に満ちた、高い位を持っています。相対した相手が浮き上がって動き回るようになる、^{かく}隠していた正体を隠し切れなくなってしまうものです。その現れてしまった悪の正体を断つのがこの技です。イエス様の前に、悪魔が色々に姿を変えて^{ちょうやく}跳躍しますが、最終的には正体をあらわにされて滅ぼされてしまうようなものです。威厳と、威光に満ちた姿です。このように、金が一番強く優れたもののようですが、実はまだその奥があるのです。それが水なのです。

（五）^{どくみょう}独妙 剣——水

独妙とは、妙も、絶妙をも越えたものという意味です。水は、最も柔らかで、最も強いものです。中国の孫子の教えの中にも、水は小石をもよけて流れるけれど、ひとたび力を持てば岩をも押し流すとあります。水とは不思議なものです。水は自分ではどんな形をも持たず、方円の器に従う、^{おうてきじざい}応適自在の性質を持っています。器が丸ければ丸くなり、四角であれば四角くなります。水は低きにつき、どこへでも^{しんとう}浸透していきます。そして万物を生かし、万物を育てます。山合いの水滴は、地に^{ひそ}潜んで^{わきみず}湧水となり、小川となり、川となり、海に注ぎ、大海となります。

独妙剣の技は、この泉、流れ、川、海の心で行えと教えられます。今までの全ての技を含み

ながら、一番柔らかで、^{おだや}穩やかな技なのです。穩やかさの中に、力が潜んでいます。本当に強いものは、静かで穩やかなものなのです。一刀流では、自分が形を作って相手を倒そうとするのではなく、相手に任せ、相手を包み込んで行きなさい、自らは光り輝く存在であっても、それを固持せず、低きについて行きなさい、そうすれば自然に相手が引き下がるものだと教えています。一刀流では、この技を、最も靈妙な技であり、我々自身も、靈妙な存在となり、一切の悪に勝ち、自分自身にも勝ちなさいと教えます。そこへ到達する為には、自己主張をやめ、宇宙の真理に思いを合わせ、自ら力があっても柔和なものとなり、平和な穩やかな者となりなさいと、説いています。一刀流の極意は、柔らかく円くなのです。

旧約聖書のイザヤは救い主なる、みどり子の預言に際し、「靈妙なる義士、大能の神、とこしえの父、平和の君」(イザヤ9：6)と言っていますし、パウロも「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくある事を固守すべき事とは思わず、かえって、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。」(ピリピ2：6～9)と述べています。

自分を捨てて、無になる事それが大事なのだと、キリスト教も、武道も説いているのです。一刀流では、このことを、逆説的に、強くなるより、弱くなる事を、勝つことより、負ける事を学びなさいと教えています。負けるべきときに、穩やかに、上手に負けられる人、それが達人なのです。キルケゴールという人は、「精神的意味において、成長するという事は、大きくなるという事ではなく、小さくなる事を意味する。神の前に無になる時、それが至高の信仰の行為である事は言うまでもない。たいいていの人間の不幸は、彼らが弱すぎるのではなく強すぎる、つまり神を認めるには余りにも強すぎるという事にある。」と言っています。

イエス様も「人に仕えられる者ではなく、仕える者になりなさい。自分を捨てる事の出来る人、その人が、神の国に入れる」と教えています。イエス様は、荒々しく、権力ある者が、世を支配している現実の中で、柔和な者が地を継ぎ、柔和に勝る者が憐れみだと教えられました。

憐れみとは、愛と同情が一つになったもので、相手の気持ちを、自分の気持ちにする、隣人と経験を分かち合うという事で、喜ぶ者とともに喜び、悲しむ者とともに悲しむ事です。イエス様は、神の子でありながら、人となり、私たちの喜びを喜びとし、悲しみや、苦しみも共にして下さり、私たちの負い切れない罪を、神様にとりなしをして下さいました。それが神の憐れみ、神の愛なのです。憐れみとは、人を救い、人を生かす働きです。剣の道を修業する者も、激しさ、荒々しさを越えて、柔らかく、円く、穩やかに、相手の立場を考えられる者が、自己

に勝ち、悪に勝ち、人を殺す剣を、人を生かす剣に変えられると教えられます。 武道の目的は、この世の悪を断ち、人々が平和に生きられるようにする事にあります。私は、小さいころから、父に剣を教えられましたが、父はよく柔らかく、円く剣を使いなさいと教えていました。ですから、私も、一刀流だけでなく、教師としても、円満な授業の出来る教師になるようにと願っていたわけです。しかし、これもこれで終わりではなく、更に次の段階に序があるわけですから、絶妙な授業は決してごまの擦り過ぎではなく、「早く円満な授業の出来る教師になりなさい。」と、励ましを受けたのだと私は受け止めたわけです。剣の道では、「志道」から「円満」まで、常に関連が有り絶えず初めに戻り、また上を目指し^{とどこお}滞^{とど}る事なく前進しなさいと教えています。 聖書で、「神が完全であられるように、あなたがたも完全な者になりなさい。」と勧めています。信仰のあり方として剣の教えと同じ事を言っているのだと思います。すなわち、我々に「神になれ。」とか、「神のようになれ。」と言っているのではなく、「常に清新さと、純粋な、素直な心を持ちつつ成長を続け神に近づく者となり、また神と人と共に奉仕する円満な信仰を持ちなさい。」と教えているのです。すなわち「神を畏れ、神を敬い、神を愛し、品節のある信仰を持ち、^{けんきよ}謙虚さと、愛と、誠実さを持って神に近づきなさい。」の教えです。柔らかく、円い人格と憐れみに満ちた信仰を持つ事が^{かんよう}肝要なのだと思います。主イエスは、心の清い者、柔和な者、憐れみのある者は、幸いであると言われています。そうした人々は、神を見、地を継ぐ事が許されるのです。

今の世の中は、荒々しく、刺とげし、悲しい事が多すぎると思いませんか？清くある事、優しくある事、他人に心を配る事を忘れ、自分が得をし、自分が権力を握り、自分さえよければと、自分の事しか考えられない人が多くなり、世の中を支配しているのが原因だと言わざるを得ません。こんな世の中、良くしたいと思いませんか？ その為には、勉強のほかにも、ぜひ、武道と信仰の道を求めて下さい。ただ武道はすばらしいものですが、残念ながら、救いはありません。武道は人間の可能性を示してくれますが、同時に限界も示します。修業を積んだ人ほどそのことを知っています。武道では人のどうする事も出来ない限界、肉体と、^{たましい}魂の死と、^{ほろ}滅び、罪から教われないのです。学問もそうです。ですから前に述べたように、多くの武道を志した者達が、信仰を求めたのです。人の救いは、イエス様の愛を通して、神様から与えられるものなのです。その事を知り、人々に伝える為にも、繰り返しになりますが、学問や、武道と信仰を、そしてまず信仰を求めて下さい。

[1997 年度前期宗教週間のメッセージ・^{こまば}駒場エデン教会牧師]